

## トレルチ逝く

長い病の後に、トレルチが世を去つた、それは五十九の誕生日に先づ二週間前であつた。「ドイツ國民は彼の死によつて重要な學者を失ひ、かつ熱い心を以つて、公共の活動に參與し、全力を我國の政治的文化的建設に献げた一人の人を失つた」と大統領エーベルトは、彼の葬儀の日に惜んでゐる。彼はベルリン大學の哲學の正教授として、同時に「der Geheime Referentrat」の職にもあつたのである。

トレルチは一八六五年二月十七日、アウカスブルグに生れた。しばらく副牧師の職にあつた後ハイデルベルヒの組織神學の教授になり（一九〇四）一九一四年ベルリンにまれられるまでは、そこにゐつた。ベルリンでは、始めは宗教學の教授であつたが、やがて哲學の教授になつた。一九一九年以後は政治にも關係してゐた。そうである。

今彼が「現代の哲學」Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungan. 1921の第二卷に於いて「私の著書」についてのべてゐる所によれば、パイルのギムナジウムにゐる頃からして「歴史の世界」に興味を有してゐたさうである。しかし家が醫者であつた爲に、自分もそのあとを繼がされるべく、科學的の學科にも親しませしめられた。かくて彼の心には歴史と自然科學との關係が問題となつたのである。まして彼の青年時代はノルドッの文化の虚偽の時代である。一方デュホア、レイモンによつて自然科學の限界が

トレルチ逝く

唱へられた時である。しかもダーウインの進化論が哲學化されつゝ、あつた時代であつた。即ち歴史的文化哲學的問題が、自然科學的世界像の框の内で眺められやうとして、唯物論と唯心論とが論争されてゐたのである。かゝる時に當つて形而上的の要求と歴史への憧憬とを有してゐた、若きトレルチが己が願を満し得る唯一の學として、神學を選んでそこに身を投じたのは當然の事であつたであらう。彼も「自分は神學に献げられた年月を決して惜しい事になつた。それどころか、當時にあつては歴史的神學は最も興味あり、緊張しかつ革命的な學問であつた」と云つてゐる。新約聖書の研究に於いてはバウル學派、特にワイツゼッカーに引きつけられたらしい。教會史に於いてはハーセに動かされる事多かつた。特にハルナツクの新しい有機的な發展の考が起らんとしてゐた。云ふ事は、彼にとつて重要な運命であつた。そこには廣い歴史の世界が開かれる。彼がゲテンゲンに學んでゐた頃アセット、レーデ、カンケル等との交際が、どれも彼に役立つ事であらう。謎めいた、心を踊らせる御伽話にも似た歴史の世界が歴史は要するに宗教的形而上學的意識の核心へ導く道であつた。彼の心はヨーロッパの精神の歴史が教理史の知識なくしては、理解しがたきを思ひつゝ、さて、宗教生活の價值と自然科學主義との争闘の問題に面しては單なる歴史神學者たるに止り得なかつた。こゝにロツチュエ引いてはティルタイの個人及び心的創造に關する哲學說に、彼が耳を傾けた理由が潜んでゐる。精神生活の獨立がさなへられる。體驗。ロツチュエ及びライブニツに於いて見らるゝ如き物體界の精神的解

釋。

かくて、極めて形而上的な *vergleichende Psychologie* の立場に於いて、歴史を解せんとの試が彼に起つたわけである。彼はまず世界宗教史の如きものを、一般的生活の基礎に於いてたて、その内に於けるキリスト教の特殊の地位を明にせんと試みるつもりだつたらしい。しかしこの人間の力をこえた目的は、その困難の知らるゝと共に、順次に縮少して、ヨーロッパ文化史との關係に於いてキリスト教の發展を見、かくて、現代の自然科学と特異の對立にあるキリスト教の現状を理解せんと試ましむるに到つた。しかし之の事さへ餘りに大なる仕事である。彼の努力は自ら、その後の問題、即ち近代の宗教問題の理解に向けられた。彼の最初に産んだ著書は、宗教改革時代の思想は中世紀的のものなる事を示し、ドイツタイミ期せずして同じ結果に立到つた「*メランヒオンとヨハンデルハルト*」であつた。しかも一應何時から現代的なる精神的基調は起るか、神に結ばれた生活の代りに、人の作りし文化は始まるか。トレルチは啓蒙時代からであるとする。その時から教會と神學との超自然的の力は後部に退却せしめられて、その狭き實踐の世界にのみ閉塞された。「プロテスタント神學及び教會に關する百科全書」の内之についての論文は收められてゐる。ドイツタイの影響の下に、啓蒙時代の終期及びドイツ理想主義についての研究もなされた。Kultur d. Gegenwart の内の *Teschichte des Protestantismus* は之の頃の著である。

無論之等の歴史的研究は、宗教哲學の問題と無關係に行はれた

ものではなかつた。しかも宗教哲學の問題は廣く心理學的認識論的歴史哲學的研究を呼び起さざるを得なかつた。彼は言つてゐる「宗教は意識の體驗としては、まず心理學的に、様々の具體的の姿を闡明する事に於て研究さるべく、その様々に異れる成素と表はれに於いて分析さるべく、又かくして初めて様々の具體的な歴史的宗教の眞理内容と價値の比較についての問題も決せられるのであるとは自分の確信に到つた。この事は自ら心理學的記述と分析から價値と眞理内容との批評的研究への移行行きの問題、並に心理學的分析と妥當理論的是認との關係の問題に導いて行つた」即ちトレルチはドイツタイ、ヴェント、ナイケン等の思想圖から、ワインデルバンド、リッケルトのそれに移つたのであるこの間の消息を示すものは、既にその日本語もある所の、*Psychologie und Erkenntnistheorie in der Religionswissenschaft, 1905.* 及び *Historische in Krants Religionsphilosophie, 1904.* であり、クリーノフツィシャの記念論文集中の「宗教哲學」は、之等の考の基礎たる宗教學を示すものである。——宗教學と云ふ如き言葉の表はれしは、その事が既に、超自然的、教會的神學とドクマティクが宗教哲學によつてせりかへらるゝに到りし精神の近代に於ける發展の歴史をさへ示すものと見らるべきである。

既に見し如くトレルチに於ける歴史的興味は一方に發展すると共に、形而上的興味、價値的關心も並行して進んでゐた。之の二つの興味の間につく所としてキリスト教の絕對的なる妥當の要求に關する問題が彼に起つたわけである。Die Absolutheit des Christent-

um und die Religionsgeschichte, 1902. 以上の問題をとりあすかつてゐる。しかしながら彼は、この問題に於いて、宗教に於ける偶然性超主観性の問題に面せざるを得なかつた。なるほど妥當の哲學は、問題解決の鍵を與へるであらう、しかし「あらゆる對象性を主観の産物——その産物は單に、先天的なる必然性によつてのみ、凡俗の平均的産物の偶然性で區別されるのである——とするのは、よつて以つてその妥當が證明さるべき宗教思想と矛盾するのである」實在は單なる主観の尖端に宿るものではない。妥當の哲學は、形而上學への準備である。かくの如き方向に於ける形而上學は、マールブランシ、ライプニッツ、及びヘーゲルに教へらるゝ所多いであらう。この思想に基く研究は、一九一三年に出版された全集の第二卷に集められてゐる。

しかしながら、キリスト教の本質及び歴史に關する新なる研究の方針が新たな問題を次々に呈出し來りしために、一時、純哲學的研究から離れざるを得なくなつた。即ちキリスト教を政治的經濟的、一般に社會的の見地から見とるのである。遠くマルクスの上層建築、並に下層建築の考の内に含まれ、マックス、ウェーバーが力強く示す見地がそれであつてヘーゲル、テイルタイ、等の一面的なる觀念論的な歴史の見方と異るかは「キリスト教的教會的文化的の歴史——そこに於いて自分は、あらゆる宗教的のもの、教理的、神學的のものを單に社會的倫理的影響の基礎或は社會的環境の反映又は反動と見た、時と共に、時と共に益々深く」と云つてゐるによつても明であらう。全集の第一卷として出した

トレルテ逝く

Soziallehren der christlichen Kirhen und Gruppen, 1911. は之の立場からの著書である。その不完全を補ふものとして出たのが Augustin, die christliche Antike und das Mittelalter 1915. である。しかし、この歴史の研究を通じて益々哲學の研究に向いてゐつた、一九一五年彼はベルリン大學の哲學の教授となつたのである。前々から歴史に對する考の變化と共に、社會的の事物に關心を有したした彼は世界の大戦の時にあたつて、實際の政事にも幾分關與し「生々深く、歴史の運命、開展、結末の本質を印象させられたのであつて」歴史哲學への興味は益々深められたのであつた。歴史哲學と論理との關係についてはシュライエルマッヘルの、一般に、リッケルト、ワインテルバンドの影響は忘れられる事は出來ない。彼は、近々に、形式的な歴史の論理、を第一卷とし、第二卷には、内容ある歴史哲學を出す筈だと云つてゐるが、之は昨年の暮あたり出版されたい。

最後に、彼が哲學の體系について抱いてゐる考をのべて、彼の死を悼むこの一紹介文を終らうと思ふ。彼は體系は、まず特殊な研究の成立と共に序々に成立すべきものと考へる。否むし特殊な研究がその體系の基礎となるべきものと思つてゐるらしい。しかしながら、勿論その體系は、特殊な研究の反省の上に成立すべきであるとの意味で特殊科學が直にその基礎であるのではないのである。人間の精神と實在とのかくれたる親密と相屬とは、やがて一般的な統一の原理をとり出さしめる。かくて體系はなるのである。従つて體系は單に演繹的のものではない。…彼は要するに歴史家であつた。歴史を通じての形而上學者であつた。(高坂正顯)